

<b>Title</b>	現代青年の人格形成と身体性
<b>Author(s)</b>	牟田, 隆郎
<b>Citation</b>	聖学院大学論叢, 16(2): 219-232
<b>URL</b>	<a href="http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=167">http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/reps/modules/xoonips/detail.php?item_id=167</a>
<b>Rights</b>	

聖学院学術情報発信システム : SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

## 現代青年の人格形成と身体性

牟田 隆 郎

Personality Formation and Physical Characteristics in Adolescents and Young Adults

Takao MUTA

The personality formation of adolescents and young adults in modern society has certain characteristics in terms of their interaction with and assimilation into their communities. For example, young people often display uncertainty, laxity, self-centeredness, lack of concern for others, dependency, instability, and vulnerability.

These traits are related to the problems of coexistence, loneliness, and lack of independence which are so prevalent in modern Japanese society. This is demonstrative of the recent weakening of the bonds between both individuals and groups, with modern youth being the first generation to confront such challenges.

### はじめに

「今どきの若いものは…」というのがいつの世でも大人たちの嘆きの言葉である。社会の中に地歩を固め、生き方がかなり安定している大人たちから見れば、変化を遂げつつある若者たちの姿は、受け入れ難いものに映りがちになる。

何を物差しとするか、それはおそらく自らの青年期のあり方を基準にしているのであろう。人はそれぞれが固有の生活史を刻んで今に至り、その刻み込まれた「身体」を通してもっぱら判断を下す。ひとりひとり個性的な身体を抱え持つことになり、そこで為される判断は、異なりつつ広がりをもったものとなる。

しかし、同時代を生き抜いてきた「身体」同士では、恐らく異なるものよりも共通のものの方が多いのではないか。時代精神という言葉があるが、いわば「時代身体」というものが形成されており、比較的似通った価値観を共にしているものと推測される。

そのように考えると時代身体、もう少し細かく見て世代身体というもののどうしの微妙な不協和音の響きのひとつが、先の「今どきの若いものは…」というかたちで現れているのであろう。不協和

Key words; Personality Formation, Modern Youth, Self-Centered Personality, Handytelephon, Coexistence

音はそも響きやすいということになるが、現代青年の人格形成には、やはり独特な展開がありそうに思えるので、この点を身体性に絡めて考察を施すとしてしよう。

まずは社会や世界というものと、各個人の人格形成がどのように関係をもっているのか、そのあたりの確認から始めよう。

## 人格の出来上がり方

人間の人格とは、各個体（身体）の内部においてのみ成長するものではない。人格は個体（身体）の領域を越えた広がりをもち、また個体（身体）の内部にもいわば深さをもっている。ここで「人格」と表現しているものは、従って、人格者という意味での人のあり方を指すものではなく、システムとしての人格、システムとしてのパーソナリティというものを表わす。

つまり、ひとりひとりの人間がお互いに影響を及ぼし合いつつ共存し、他方、各個体そのもののいわば内部に、何か独自の「その人らしさ」のようなものを築きあげているイメージとでも言おうか。あるいは堅苦しく言えば、人は共同存在（共存存在）でもあり独自存在（私的存在）でもあるということにもなるうか。

その事態は各人に視点を置けば、「外部世界」と「内的私」に分かれている。自らのまわりには自らを中心にして世界がまわりに広がっており、と同時に、自らのいわば身体の内側に「私」というものがここにある。この「内的私」のみを私の人格と考えてもよいと思えるかもしれない。身体その皮膚の内側にのみその人の人格が宿ると考えるのである。

確かに素朴な経験として捉えられる「私の人格」とはそういうものであろう。ある人物を「他ならぬその人」と認知し同定するのは、その身体を生きているその人を指し示すことに他ならない。「内的その人」イコール「その人・その人格」であり、その人にとっての外部世界は一応考慮外のものとなっている。

けれどもこうは考えられないだろうか。何でもいいのだが、ある人が例えば怒りっぽいとする。怒りっぽいという特徴は、なるほど確かにその人の人格の内的一部である。

とは言え、その怒りっぽさはひたすらその人の内部でのみ形成されてきたわけではないであろう。その人がこれまで生きてきた過程で、いろいろな他者との関わりやいろいろな体験を培地にして、そこにそういった性格特徴がいわば積み上がってきているのではないだろうか。怒りっぽいという特徴は、まさに他者との「関係」の中で発現するわけであり、従って怒りっぽさとは、その人と他者との間にあるものとする言えるのではないだろうか。

人の性格特徴とはその人独自のものでもあり同時に、その人をとりまくまわりの世界との関係を表現するものなのである。またそこで言う世界とは、人類に普遍的な世界などではなく、その人にとっての「外部世界」であり、その人にとっての「生活世界」である。

こうして人の人格というものが、生を授けられてから以後、他者やまわりの環境との「関係」のなかで築かれてきていると捉えるわけである。そうであるならば、人の人格とは、その「外部世界」がかなり内側に折り込まれて「内的私」を形成しているとも言える。

もちろん人間には想像力・思考力が備わっており、その「力」によるセルフ・イメージの形成という側面があることも無視できない。その「力」は、生きつつある人格システムをメタ認知することを可能にする。「私」とか「自分」という概念を当たり前のように私たちは用いるが、それはこの「力」を私たちが持っているからである。生きて機能しつつある人格システムがあることに加え、認知された「私システム」と言うものが並存する。

この「私システム」は、セルフ・イメージであるとかセルフ・ストーリーとして、通常は暗黙のままに働いている。このように2つのシステムを抱えているところが、人間の人間たる所以であろう。またこの2重システムを抱えて生きていくそのこと自体の中に、人間的な悩み（実存的な悩みとも言おうか）も生まれてくる。

## 人間集団と人格

さて、その人にとっての「外部世界」がある程度内側に折り込まれて「内的私」を形成していると述べたが、外部世界は、全部そのままベッタリと内に折り込まれるわけではない。そこには濃淡のようなものがあるわけで、私らしさに近いところにあるものから比較的遠いところにあるものまでわたる。

例えば近い人間関係、親子であるとかきょうだい関係などは、その人の「内的私」のかなり中核に近いところに収まるものと思われる。次いで身近な人間集団（もっともこれも幅が広いが）の世界がその外側に広がり、さらに大きな単位かつ公的な単位である社会なり国なりの領分が広がる。外のほうでさらにさらに遠いところにあるのが世界なり宇宙なりということになる。ちなみに「文化」というものは、「内的私」の中核から辺縁に至るまで幅広く折り込まれている。

ついでにもう少し言うならば、自然環境も含めた物的世界環境も、何がしかの折り込みが施されて、やはり「内的私」の一部を担っている。人間の人格（システム）は、こうして生物、無生物、組織やシステム、諸関係や諸制度などなどをその組み立ての材料としている。以上の如く、生理的なものを含めた「身体」をその在り処とし、外部世界を内に折り込みつつ「内的私」は成立している。

改めてその「内的私」についてだが、ここではなしの焦点を青年の人格形成に絞るとすると、そこで一番重きをなす「外部世界」は「身近な人間集団」ということになるとと思われる。親との関係を初めとする近い人間関係で培われるのは、人格の中核あるいは基盤となる部分であるが、青年期はその人格形成の段階は一応通過していると見なす。

もちろん人は誰でもが、乳児期から幼小児期にかけて、自らにとっての大切な人との関係によって、何らかの「傷」を負っている。つまり人格の基底部にその「傷」を抱えている。それでも多くの人は、その「傷」をいったん包み込むかたちで、人格の新しい部分を作り上げていく。そしてともかくにも青年期に辿りつく。

その時期の人たちにとって「身近な人間集団」が、人格形成の主たる対象世界となる。もちろん「人間集団」といっても、さまざまな種類が考えられるわけだが、ここで主として取り上げたいのは、現代日本社会における同年齢集団ないし同年代集合である。これは小は友だち集団から、大は同年代の青年全般を包み込む集合にまで及ぶものである。日本の教育界におけるいわば同年齢構造（たとえば何才になったら一斉に入学するとか）が、この種の人間集団を母体とする人格形成を一層強化している。

### 現代青年の風俗 携帯電話

現代青年の人格形成を眺めるとするならば、彼らの作っているあるいは彼らが加わっている人間集団の様相に目を向ければ、ヒントを得られそうである。これはつまり、現代青年の風俗を概観するということにもつながるだろう。

まず注目したいのは、彼らの持っているコミュニケーション・スタイルである。特に、今世紀にはいって今一層急激に普及し、かつコミュニケーションの道具として頻繁に使用されているものに「携帯（電話）」がある。今や小学生から大人までが携帯を持ち歩いているわけだが、中心となって利用しているのは、やはり青年期の人たちであろう。

一般に現代日本の風俗現象は、青年を起点としてそれが他の世代にも広がるという特徴があるように思われる。「若さ」礼讃の風潮が恐らく背景にあるのであろう。もちろん携帯の使用も、その例にもれない。

いずれにしても青年のコミュニケーション・スタイルを取り上げる場合、携帯の存在は無視できない。いったい何故これほどに携帯は普及したのであろうか。単に便利というだけではあるまい。この急速な広まり方と、青年の人格の有り様とは深いつながりがあるはずである。

テレビであれ車であれ他の何であれ、便利であるとか必要度の高いものはいろいろあるが、普及スピードはもっと遅かったはずである。ただ携帯の機器の値段が安いということ、これは素早く広まる上でかなり有利にはたらいたポイントであることは確かである（使用料は必ずしも安くはないが）。それにしても「とびつく」と表現したいほど、一様に青年は携帯を手に入れ利用している。その魅力とは何であろうか。

携帯が普及する前に一時期、ポケベル（ポケットベル）なるものが巷に出まわった。もちろん使い手は青年たちである。それ以前は固定電話が、離れている人との言語的コミュニケーションの主

たる手段であった。ポケベルは言葉を直接伝えるものではなかったが、「固定」されていたもの（電話機）が、家から離れたとことの意味は大きかった。つまり私的な会話なり連絡なりが、より一層可能になったのである。携帯の使用に至って、私的な会話は原則いつでもどこでも可能になった。

この、家を親を家族を離れて私的な会話ができるようになったことの意味は、とくに青年にとって大きい。なぜならば、家を離れて（心理的に離れる場合もちろん含めて）独自の人格を作り上げる大事な時期が青年期である。友人を初め家族以外の人たちとの交わりを通じて、青年は人格を彫琢していく。家に対しては当然「秘密」を持つことも多くなる。秘密を持つことはまた、自分らしさを伸ばしていくことにもつながる。

しかしここで疑問が生じる。その気になれば何もあれほど携帯を使わなくても、友達などとの連絡や会話はできるのではないだろうか。家に対する秘密も、別に携帯がなければ保てないということでもないだろう。となると、四六時中といつてよいほど携帯まみれになっている今の青年にとって、携帯のもつ意味は、まだまだ他に何かありそうだ。

## 絆としての携帯

必要となったから購入するというよりも、持たなくてはならないから購入する携帯。青年たちにとっての必需品（これを「お守り」と言った人がいた）である携帯の使われ方から、青年の人格の様相をさらに探ろう。

いつでもどこでも他者とコミュニケーションできる。事柄や事態についてあれこれ対話するというだけでなく、単なる連絡にも用いる。連絡というよりも、「今どこ？」「何してる？」などといったちょっとしたつながりの確認にも用いられる。

携帯コミュニケーションとはまさに、この「つながり・絆」の確認行為をひとつの大きな特徴とする。他者からみるとたわいもないやりとりこそが、みんなとどこかで自分につながっているんだと安心するための大切な行為なのである。そんなことならべつに信頼感を他者に対して抱いていけば、いちいち確認作業をしなくてもよさそうに思えるかもしれない。

しかしこの信頼感が内的に確立されていないからこそ、彼らは確認を続けざるを得なくなっているのではないか。そうであるとすると、現代青年の人格には「不確実感」が巣食っているということになる。他者や外的世界に対して信頼感がはっきり確立していないということと、内的私に不安定なこととは対応している。

いや、不安定とか不確実と言い切るのは、早とちりかもしれない。現代青年の人格の様相は、外部世界と内的私共に流動的な様相を色濃く持っていると言えそうだからである。流動的であることは不安定とも言えるが、他方、柔軟であるとも言える。

いずれにせよ、コミュニケーション・ネットワークを友人間で一貫してもち続けることで、彼ら

青年の人格構造は維持されているようである。携帯は、その不断のネットワーク構築のための必需アイテムとなっている。

## 携帯と自己中心性

ところで携帯は、即時的同時的コミュニケーションのためだけに使われているわけではない。対話以外の機能のひとつに「メール」機能があげられるだろう。これも一種の対話の延長のような性格をもってはいるが、大きな違いは、同時ではなく継時的とも言えるコミュニケーション特性にある。

メール機能は既にパソコンにおいても実現されているわけだが、いずれにせよ、情報や伝達の発信者が主導権を持っている。受信者には、伝達事項にどう対処するかが任されている。

もっともメール以外の通信手段も事情は同じであり、本質的な違いは無いと言える。違いがあるとすれば、その頻度の多さではないだろうか。文章や書類にするとすると、それなりの手間もかかるし、そう簡単に次々と伝達するという事はかなわない。その点メールであれば、キーをちょんちょんと叩くだけで、即伝達が可能である。

この点において「自己中心性」がより発揮されると言えないだろうか。「気まま」に送信することがより可能になっているわけであり、それだけ、より自分中心に自分の都合が前面に出てきやすいのではないか。

「自己中」と言えば、現代人のどちらかといえばマイナスの特性として問題にされることがあったかに思う。それも青年の人達の特徴のひとつとして問題視されていたようである。

自己中心ということは、その場合「利己的」という意味を強く負わされているようだ。自らの利益をまず優先し、人のそれは二の次にというニュアンスである。このような面は、確かに現代日本人の多くに見られる特徴かもしれない。何も青年たちだけに咎を帰するわけにはいかないであろう。

けれども、携帯メールの日常的使用状況を考え合わせると、現代青年の人格特性は、何も強固な「自己」を抱えた上での「自己中心性」などではなく、ネットワーク依存、他者依存を背景とした、むしろ小さな狭い「自己」形成あるいはルーズな「自己」形成を大きな特徴としているのではないだろうか。

先に絆としての携帯という言い方をしたが、外部世界との連携に依存する割合が大きければ大きいほど、実は内的私はやせ細っていたりルーズになっているのではないか。そこにはやはり、状況依存が強いが故に、一種の危うさが伴っていきそうである。

## 情報源としての携帯

携帯はまた、情報を蓄えたり入手したりするための優秀なツールでもある。また、最近ではカメラ機能なども併せ持つ携帯が普及している。

人類はその賢さ故に、さまざまな道具を発明してきた。いわば自らの身体の機能や能力を、さらに拡張し強固にする道具をである。携帯もまさにそのような機能や能力をもっている。

自分の携帯を紛失するということはまた、自分にとって大切な諸機能や諸能力を無くしてしまうことでもある。この手の平にすっぽり入るサイズの道具が、実は世界とつながる目であり耳であり記憶であり、ひいては自分の身体の大事な一部である。

しかし、身体のもつ機能や能力をいわば外部装置化してそこに任せてしまったがために、本体の「自分・自己」のほうは、やはり幾らか貧しくなってしまったのではないか。ここにおいても、内的私がやせ細っているのではないかという危惧が生まれる。

便利な道具は何であれ、人間本来の何かを弱くしてしまう裏側の面を持っている。道具を発明するのが人間の人間たるひとつの所以であるとすれば、その道具に依存すればするほど、自らの内側を貧しくするリスクを抱えるのは宿命かもしれない。携帯もそうした道具、強力な道具のひとつと言えそうだし、そうであるとすれば、それがひとの何に影響を及ぼすのかを今後考えねばならないであろう。

さて情報源としての携帯であるが、手軽に情報を手に入れるとか保持することができるということは、それを内に蓄えておくという一種の「緊張」をあまりしなくても済むということにもなる。手掛かりはすぐに外部から得られもするし、携帯のメモリーから取り出すこともできる。そこで必要なのは、情報を欲しいという主体の意思であり決断だけである。強いて言えばあと必要なのは、キーを叩く（押さえる）ちょっとした労力である。

このような生き方が可能になった時、青年の人格は、自らを際立たせていくという内的緊張を失いがちになり、「軽く」なったり「ルーズ」になったり「気まま」になったりするのではないか。もちろんそこには、繰り返しになるが、「危うさ」なり「不確かさ」が伴うことは大いにありうることである。

話しは跳ぶが、最近の青年の服装を見ると、ルーズさにひとつの特徴があるように見える。ズボンをかなり下げてはいたり、あるいは、仕事に向かうのにも拘らず、履き心地のゆるいサンダルで出掛けたりする。また彼らの姿勢も特徴がある。背中が丸まりがちなのは日本人全体とも言えるが、そこら中にすぐベタリと座り込む。顔を見れば口が開いている。とにかく今の若者には、どうも重力に抗する力が不足している。

余計な力が抜けて、いい意味で体が緩むのは大切なことであるが、日常的に緩んでしまっている



ようなのである。体だけではなく、例えば話し方でも語尾上げをしたり、「～とか」と曖昧な表現をしたりして、どうも不確実な印象がある。

本来内的にいろいろなものを蓄え、内側から支えるものをしっかりと形成しなくてはならないのに、外部への依存が高ければ高いほど、青年の身体はグニャグニャになっていく。それはまた人格も悪い意味でグニャグニャになっていることではないか、やはり心配である。

## 現代青年の風俗      パーチャルな世界への親和性

青年が興味を持つものはいろいろあるが、ここで注目したいのは「パーチャル」な世界への傾斜、非現実的な世界への憧れである。私たちの身のまわりには、実はさまざまな非現実的な作りもの（あるいは本物そっくりの作りもの）に満ちているが、その世界に親和性が高いのはやはり若い世代であろう。ゲーム・センターでのゲーム、コンピューターを使ったゲーム、携帯でもできるゲーム、まずゲームの世界は多彩である。映画などでもCG（コンピューター・グラフィック）が盛んに使用されている。

いったい何が現実的（リアル）であるのか無いのか、現代社会はその境界がかなり不明確になりつつある。ひとたび内側に強固な内的私を作った人においては、パーチャルな対象に接したとしても、その内的私には、対象に興味をもつにしても揺るぐことはないものである。それが外的世界に属するものであり、内的私とは一線を画するものであることの認識を、どこか自然に行っているからである。

ところが、小さい頃からこのパーチャルな世界に接してばかりいると、内的私の形成そのものがパーチャルな色彩を帯びやすくなってしまふ。パーチャルな世界が多く内に折り込まれてしまうのである。この時、その人の内的私と外部世界との境界はゆるいものになる（この意味から、多くのゲームはなるべく大人になってから楽しむべきなのである）。

当然のこと、人格は「グニャグニャ」したり「フワフワ」したりとルーズな様相を保つことになる。外から見たり接したりすると、それは「自己中」に見えなくもない。先にも述べたが、それは自己がしっかりある自己中ではなく、リアルなものがピンとこないがための自己中なのである。世間知らずという見方もできなくはないかもしれないが、世間知らずという以前に、「世間」が人格に内在化されていないという感じなのである。

リアルなものをあまり内に抱えもっていない時、青年は非現実的なものに近いところに住んでいる。それらに違和感をあまり感じないからである（ここから若い人の科学離れも起きてくる）。その例をあげるとすると、超現実的なものとかオカルト的なものということになるか。あるいは超能力的なものや神秘的なものということにもなる。

ある点で「この世」と、「あの世」や「別の世界」とが接近していると言えなくもないが、その実、

「この世」性が乏しいのである。これは言い換えれば、「死」の感覚が薄いと見えよう。もちろん誰でも「死」をリアルに体験することはできない。私たちは、「生」しか生きられないからである。

死の感覚が弱い（つまり生の感覚も弱い）ことは、簡単にあちらの世界に行ってしまうことにも結びつく。それなりの理由は何かあるのであろうが、あまりにも（良い意味での）生への執着が無さ過ぎる。この世で何らかの不都合があったりすると、たちまちリセットして別の生を期待したり、少なくとも「今」から逃げ出したいくなってしまふ。この点からは、現代青年の人格形成において、「脆さ」という特質が付け加わるようになってくる。

## バーチャルな世界と身体性

さてバーチャルな世界に親しんでいると、内的私の基盤でもある「身体」も危うさを抱え込むことになってくる。どこからどこまでがリアルな私の身体であるのか、ギクシャクしてくる。

人混みのなかをひとに肩をぶつかけたりしながらまっすぐ歩く青年がいる。別に人柄が悪くてわざとぶつかっているわけではなさそうである。自分の身体と他者の身体とをどこでどう折り合わせていいのか、その感覚が十分育っていないようなのである。ひとがいて自分がある。お互いが共存するためには、時に譲り合うことも必要になってくる。そこのところの感覚が身体化されていない。

これを私的な領野と公的な領野をどう共存させるかさせないかの問題と置き換えると、電車の中での若い女性の化粧姿も納得して拝むことができる。彼女たちの身体は公的な場所にあるのではなく、私的な領野の延長上に置かれているのである。

私的と公的の境界が薄いのであれば当然、従来の私的な行為とされていたものが、公の場に進出してくることになる。世界の「私化」がそこで起きている。もちろん強力な「私」の世界があって、それが「公」の場に進出しているわけではない。どちらも薄くなり、かつ境界も薄くなっているのである。

話しは化粧だけにとどまらない。携帯の車中での使用はもちろんのこと、音楽鑑賞や飲食などもそこに含まれる。それぞれもともとは然るべき場所で為される行為であった。それが今や堂々と公の場所でも為されることになってきたわけである。「公」の衰退である。さすが排泄行為や性的行為はまだほとんど人目から隠されてはいるが、これとても…。

さて身体がバーチャルなものに浸されると、その身体そのものの形態や特徴もまた浮遊する<sup>(6)</sup>ものとなる。髪の毛を染めることは青年にとって常態化しているし、耳たぶに穴をあけたり、体のあちこちに穴をあけてなにか金属を通したりなど、その身体の加工の程度は勢いを増しているかに見える。加工と言えば、昔から行われていた（美容）整形もますます盛んなようだ。プチ整形などと言って、その軽さを特徴としている。

身体に強いこだわりをもっていそうに一見見えるが、その実、身体性はむしろ希薄化している（い

わば他者の眼差しに支配されやすい対他身体となっている)。身体性の希薄化あるところ「私」の希薄化があり、ひいては「生」の希薄化がある。

## 現代青年の風俗 キレやすい

希薄化があちこちに見られるとはいえ、それは単に薄く引き伸ばされた「私」があるというわけでもなさそうだ。その一方で、「私」への過剰な敏感さも存在する。どこかしら鈍感になった身体と、過敏になった身体とが重なり合っている。

何に対して過敏かという点、自己の尊厳の侵害に関わることに對してである。透明でのっぺら坊になったかに見える現代青年の身体は、いやどうして、ある限界を越えると激しく反応する。俗に言う「キレル」というのもこの部類である。

一見飄々とあまり余計なことに関わりをもたずにいるかと思えば、一定限度を越える刺激には強く反発する。公的な世界の自覚があまりしっかり内的に形成されていないところにもってきて、バーチャルなものに浸されていることからくる「想像力の貧困さ」が浮上し、その結果想像力というものがクッション機能を果たさずに、いきなり自らが陥しめられたと感じとり、瞬間的に爆発する。自らの尊厳が侵されたと感じとるまでの経路が、あっさり短いのである。

外界と(心的)内界との距離の無さはまた、内的欲望の充足のために、「想像力による抑制」を欠きつつ外界の対象への強い執着となっても現れる(「内的私」の偏狭さ)。これが「オタク」化現象でもあるし、悪くすると「ストーカー」行為や犯罪行為とも結びつく。

世界の一部分に一方的に強い執着を示し、他方その対極には誇り高き自我がある。傷つくことを恐れる割に、人が傷ついていることには無頓着である。ここにも「世界の私化」、それも狭小な「私化」が窺える。繰り返しになるが、想像力による補いが少ないのである。

バーチャルな世界に身を浸すこと、もっと拡大して考えれば、テレビなど刺激を豊富に放出する機器に常に幼小児期から接していると、外的刺激の操作やそれらへの対応に長けることはあっても、内発的なアイデアは枯渇しやすくなる。ましてや、自分の部屋など室内で生活することが多くなり、外で友だちと遊びまわる機会が減ったりすると、他者への共感性など、他者に差し向ける想像力が育ちにくい。

想像力とは内的な積極性であり、生活が受動的に刺激を受け取ってばかりいるのもであると、いよいよ貧しい自己中が出来上がってしまう(万能感は保っていたりするが)。これがキレルというかたちで他者への攻撃に結びついたり、そういった傾向が集合すると「いじめ」行動に結びついてしまったりする。想像力が乏しいと、異質なものへの寛容さも育ちにくいからである。

## 現代青年の風俗 「間」がもてない

他者への想像力が貧困であるとなると、それは同時に「内的私」の実感も薄くなり、ひいては生きている「身体」感覚も浮遊しやすいものとなる。その時、他者の身体（他者の存在）との間における「間合い」も不安定なものになる。そしてさらに、自ら自身との「間合い」も不確かなものになる。

先の「携帯」のところでも述べたように、常に他者と携帯コミュニケーションを保ち、「つながり・絆」の確認を行う。これは言い換えると、他者との関係で「間合い」がうまくとれていないことを意味する。常時その隙間を埋めていないと落ち着かないからである。

隙間を埋めるといえば、これから先のスケジュールを埋めようとするのも、この「間合いがとれない」と関連する。これから先の自分の時間に「空白・空欄」があることが耐え難いわけであり、これは、自らの存在内部に隙間があることに気付くこわさがその底にある。空間的にも時間的にもカラッポはこわいのである。

ちょっと前に流行ったプリクラ現象も、これら間のとれなさを示している。一緒に撮った顔だらけの他者と一緒の写真？で、専用のファイルをびっしり埋め尽くす。相手から情報を聞き出してアドレス帳を埋めていくのも同じである。

交友関係が実際に広いわけでも何でもない。自分の空虚さを、自分の内にある隙間を、何かで埋めておかななくては落ち着かないのである。そこで自分の内側を、他人の顔や住所・電話番号やメールアドレスなどで埋め尽くすのである。外部世界における隙間埋めと、内的私にある隙間埋めを同時にやっていることになる。

こうして青年は、否が応でも「他者依存」「他者志向」「他者による承認」の程度を強めていく。実際には、お互いの身体が不意に近づいたりすると、どう間をとったらいいのか分からずにドギマギしたりするくせに、「他者」でしかその隙間を埋められなくなっている。

従ってそこにおける「他者」とは、リアルな存在というよりも、バーチャルなゲーム・キャラクターあるいは記号的なものようになっていないか。例えば喧嘩しても、痛んでいる相手のリアルな身体に想像力が及ばず、あたかもゲームであるかのように相手の身体を叩きつぶしてしまう。

恐らくこれからの青年の犯す犯罪においては、然るべき理由が整って為されるというものではなく、不条理な、理由が不明確なものが増えると思われる。相手が命をもったりリアルな生身の人間ではなく、なんとなくまわりに蠢いているもので、しかも自分の尊厳を傷つけるものである時、事件は起きる。犯罪を犯す人においても、別にはっきりした自覚が備わっているわけではなく、内的衝動や怒りや不全感を、単にぶつけ吐き出しただけということになってくる。

つまり、はっきりした「自分」が、くっきりとした姿をもつ「他者」に対して何かをするということが、成り立ちにくくなっている。「間がもてない」と述べたが、その「間」とはもちろん想像力で補わなければならない間である。そしてこの想像力は、小さい頃から大勢の他者と身近な仲間集団を作り、そこで「共存」の知恵を学びとっていくなかで、培われるものなのである。子どもたちにとって、豊かな集団形成こそが、豊かな人格の形成に結びつくのである。

## ま と め

20世紀の後半に我が国が経験した未曾有と言ってよい経済成長の影響は、我が国の青年の人格形成を語る上で忘れてはならない。

ひと言で言えば「豊か」になったということだが、この豊かさは人の在り方をかなり変えたかに見える。モノ・カネ原理が幅を利かし、暮らしやすくなった反面、人と人との絆はむしろ薄くなった感がある。貧しければお互いに助け合うことが共存の知恵でもあった。しかし豊かになると、別の共存の原理を探らねばなくなる。表向きは別に助け合わなくとも、それぞれ「自立」して生活していけるからである。

改めて人は他者とどのように共に生きていったらよいのか、その方途を模索しているのが今ではないか。

こうした状況は、青年の人格形成に多大な影響を行使している。まず暮らしが豊かになったことで自分の部屋を与えられ、小遣いをたっぷり与えられ、しかも、テレビゲームを初め、一人でも遊べる機器が容易に手に入った。それらは刺激に満ちており、あまり身体全体を使わず、また他者の存在を必ずしも必要とせずに、時を消費することを可能にした。自分の気ままに、他者との関係で気まづくなったり傷ついたりすることなく、一応の達成感なり衝動の満足なりを得ることができる。他者との揉み合いをあまり経験せずに、好きなことを選び取りつつ内的欲求を満たしていく。

この状態の裏側として「引き込み」なり「不登校」なり「社会恐怖症」、あるいは「パラサイト」現象などが出現しているわけだが、大勢としては、多くの青年は伸び伸びと自分の世界を開拓しているかのようである。

しかしこれまで述べてきたように、現代青年の人格形成には、やはり危うさや脆さが潜んでいるように思われる。先に現代は人と人との絆が薄くなったと指摘したが、これは同時に「孤独」の問題でありまた「依存」や「どう共存するのか」の問題でもある。このいわば最先端の問題・課題に、現代青年が先頭を切って取り組んでいると言ってもよい。いつの世でも、感受性に富んだ世代や人々が、社会の抱える課題や矛盾と真っ先に格闘するものである。

人と人との絆を携帯などのツールで求め、そこにある隙間を埋めようとする。他者の眼差しをいつも意識し、なおかつ他者からの承認を常に求める。勢い、自らの身体も自己愛をもとにしつつ他

者向け仕様に改め、時にいろいろな加工をそこに施す。

それでも他者との「間合い」がうまくとれず、またどう付き合っよいかの迷い、自分の在り処を確認したいあまり、自分を中心とするネット状の（存在保証）関係を築き上げようとする。

目は他者なり外界なりに向きがちになり、それらへの対応に心を奪われがちになるため、じっくりと内的想像力を育てることが難しく、他者への共感性の発達は停滞してしまう。他方自意識なり自尊心は、自己中心的生活をしてきたことからそれなりに保たれているため、他者の姿は時に、自らの大切なものを侵害したり妨害したりする厄介者と映ったりする。

外の世界なり公のものといったものが、人格の内側へとあまり効果的に折り込まれずに、結果、私的世界を公の世界へと持ち出してしまふ。両者の境界は薄いものとなっており、ウチ ソトのめりはりが効きにくい構造となっている。

めりはりが効かないということは即ち、「内的私」の人格構造が「ゆるく」なり、それをはたから見ればルーズに見えたり、軽く見えたり浮遊しているように見えたりする。本人たちにあっては、不確実感なり不安定感が強くなりがちであり、時に、こだわりをもつものを見つけ、そこに一応自らを繋ぎとめて安定をはかろうとする。しかし、いろいろなかたちで自分はひととは違うということとを主張しようとしている（差別化）のは分からなくはないが、少し離れて見ると、皆同じように見えてしまふ。

内的私の構造がゆるいということはまた、「リアルなもの」の感覚が異なってきて、非現実的なバーチャルなものにひかれたりすることとも関係している。場合によっては、オカルト的なものや超能力的なもの神秘的なものに引き寄せられもする。彼岸と此岸の境もはっきりしなくなり、生と死の境界も定かではなくなる。ネットで知り合うネット依存人格が集って、ネット情報を参考にネット心中をはかたりする。

別にけなしているわけではなく、この現代青年の危うさや脆さはまた、現代日本社会に生きる他の世代にも共通の問題である。先にも言ったが、今まさに自分というものを構築しつつあるいわばまだソフトな状態にある青年世代に、最も社会の抱える課題が示されやすいからである。

## お わ り に

21世紀をどういう時代にするのか、人はどう生きていったらよいか、青年たちが人格の形成をかけてその試練にまず晒されている。「今どきの若いものは・…」という前に、他の世代、特にこの社会を作ってきた大人たちは、「これから私たちはどうあるべきか…」、それを現代青年のあり様をよく吟味してから自らの課題とすべきである。

豊かな「子ども」時代を奪い、自然環境を破壊し、利益や効率のみを優先し、弱者を踏みつけにしたり切り捨てたりし、品のない姿を子どもたちの前に晒してきた大人たちの責任は重い。

これらの事柄を改めつつ、これからは大人たちが青年たちの道標となるべく、自らの在り方を高めていくべきであろう。そこにはかなりたいへんな道程が待ち受けているように思えるかもしれない。そうかもしれないが、そうでないかもしれない。

何となれば、ヒントは私たちが日々生きているその身近な日常の中にこそあると思われるからである。高邁な理想を掲げて、それが身になっていなければ、口先だけでは意味がない。

ほんの些細なちょっとしたことの中に、多分そのきっかけがある。そしてそれはまた多分、自分のまわりの人を「大切にすること」に関わりがあると思われる。ほんのちょっとしたそのようなことに気がまわるかどうか、そこが境目となりそうだ。

#### 参考文献

- (1) 波頭亮、『若者のリアル』、日本実業出版社、2003
- (2) 今村仁司、『近代の労働観』、岩波新書』、1998
- (3) 間庭充幸、『若者犯罪の社会文化史 犯罪が映し出す時代の病像』、有斐閣選書、1997
- (4) 芹沢俊介、『子どもたちはなぜ暴力に走るのか』、岩波書店、1998
- (5) 山田昌弘、『家族というリスク』、勁草書房、2001
- (6) 吉本隆明、『ひきこもれ ひとりの時間をもつということ』、大和書房、2002